



"大空に架かる虹"のひとかけら : 『響きあう東西文化 マラルメの光芒、フェノロサの反影』の刊行に寄せて

著者	宗像 衣子
雑誌名	鴨東通信
巻	99
ページ	14-15
発行年	2015-09
URL	http://id.nii.ac.jp/1044/00001842/



大空に架かる虹のひとかけら

——『響きあう東西文化 マラルメの光芒、フェノロサの反影』の刊行に寄せて——

このたび、一九世紀象徴派詩人ステファヌ・マラルメ（一八四二—一九〇八）の文芸思想を基点に、芸術諸ジャンルの関係を考察し、それが東洋文化・ジャポニスムに関わりながら、明治期に日本の伝統美術を救い出したアーネスト・フェノロサ（一八五三—一九〇八）の思索と照らしあうに至る様相をまとめ上梓した。

第一部「文芸に見る自然観」で、マラルメの「創造的無」の幾何学的抽象性に照応するイマージュ表現と、画人俳人・与謝蕪村のことばとイマージュ、ひいては日本美術の時空間における主体表現の吟味によって、創造主体の非分析的なあり方を探求した。そこに日常と非日常の同源性かつ自然に融合する人間を推察し、ロラン・バルトの俳句論と日本文化の自然観にそれを確認した。次いで第二部「創造における逆説性」で、こうした視点から、芸術の中核としての音楽について、マラルメを師と仰ぐクロード・ドビュッシーの「無」の意識、また虚無と東洋性で繋がるジュールジュ・ブラック、パウル・クレーの絵画と音楽の共鳴、およびジャン・ポーランの詩学を探索した。さらに世紀末の両義性を生きたオーギュスト・ロダンが注目する日本の自然観を考察した。

宗 像 衣 子

第三部「芸術表現の交流」では、現代へ論を進め、印象派・象徴派を継承するアンリ・マチスの挿画『マラルメ詩集』や日本版画への関心、ロジエ・カイヨワの「石」のエクリチュールと遊び、カイヨワと共作した書家森田子龍の漢字、そしてマラルメを基盤としたオイゲン・ゴムリンガーのコンクリート・ポエトリーなどから東洋の無に誘われ、西洋に学んだ日本画家東山魁夷に、端正で図案的な絵と、自然に託された現代文化への提言をみた。

最後に第四部「伝統文化の現代性」で、このように紡がれる東西近代の芸術文化に対し、岡倉天心を精神の父とする九鬼周造の時間論、芸術ジャンルの解明と日本芸術の「無限」を確認した。続いてフェノロサの遺作『漢字考』に「思想絵画」としての漢字・詩を、次いでエズラ・パウンドとウィリアム・バトラー・イエイツによって価値が明るみに出された遺稿『能楽論』に、日本の自然観に根差す「無」を認め、美術運動と支えあう文学認識を見出した。それは象徴性を基軸とし、バルトにポール・クローデルに、抽象芸術に繋がる。こうして芸術ジャンルの総合によって、響きあい現代に向かう東西文化の交錯をたどった。

子龍はマチスに共感して書と抽象芸術に、東西の大空に架かる虹を想ったが、拙著は、一瞬の幻影としての幾重もの繋がり、パリ「部屋の人」の光芒、大津「三井寺の僧」の反影を示せないだろうか。マラルメたちの「主体の消失」、イマーージュ表現の必然性、律動の抽象性、創造の中核「無・空白」は、アール・ヌーヴォーに結ばれた。日本の自然観、ジャポニスムへの関心によって、二人そして人々は繋がったといえないだろうか。

マラルメは、パリ郊外ヴァルヴァンの別荘の一室「日本の部屋」に日本の扇や団扇を飾り、扇面に詩を書き、身近な友に贈った。生前唯一の自選『マラルメ詩集』に「マラルメ嬢の扇」(図1)、死後編纂された『折ふしの詩句』に「グラヴォレ夫人への扇」(図2)がある。整然と美しい前者の扇面は目を惹くが、後者がより意味深く思われる。二者にはいわば異国趣味の域とジャ



図1「マラルメ嬢の扇」



図2「グラヴォレ夫人への扇」

ポニスムへの展開の相違を感じる。彼が親交した近代絵画の師エドゥアール・マネ、印象派クロード・モネやエドガー・ドガ、象徴派ポール・ゴーガン、彼らも固有の創造性をもって扇面に描いたが、その大胆な非対称

性や余白の際立つ構図等の点からみれば、後者の扇面には、詩人としての「ことばとイマーージュ」による独自の布置の感覚が見受けられ、現代芸術に大きな影響を与えた詩人最晩年の図形詩「骰子一擲」、その「ことばとイマーージュ」の思索に基づく斬新でリズムカルな配置との照応を思わせる。日常の遊びと深甚な芸術は、時に作家の意識を越えないだろうか。

遙か昔、卒業論文で「マラルメ嬢の扇 空無の思想」をテーマにした。そこからほんの一步進んだだけかもしれない。フェノロサは旅先の心臓発作による五五歳での急逝が惜しまれたが、マラルメも五六歳で咽頭痙攣のため急死した。今ならもっと長生きできたであろうことはともかく、おこがましいが我が身を振り返って恥ずかしくなる。おこがましいといえば拙著全体にそれは満ちている。しかしそれは、歴史的考証と理論的構築の間を縫う文芸学の立場にも由来すると受け取ってもらえれば幾分救われる。すべてが「協力」である「研究」の営みのなかで、ささやかな役割を果たすことができればと願う。

(神戸松蔭女子学院大学文学部教授)